

統一民族史観（最終回）

この内容は一九九一年七月に講義されたものであり、南北統一に対し北の唯物史観を克服するための統一史観です。

（文責・編集部）



韓国統一思想研究院院長

李相憲

（四）宗教観

北韓の史観はキリスト教、儒教、仏教などすべての宗教を一種の迷信としてみてみると同時に、支配階級の搾取と抑圧を維持するための階級支配の道具とみています。時には、宗教は人民大衆の階級意識を麻痺させる「民衆の阿片」であると言っており、究極的には宗教を完全に除去することを主張しています。それにもかかわらず、北韓では今日、一部の教会や寺を残しておいて、北韓にも宗教の自由があるかのように装っています。これは、かつてスターリン時代のソ連の場合と同じように、自由世界、特に南韓

の自由人や宗教人たちの目を欺くための策略であることは言うまでもありません。

神の復帰摂理から見る時に、イエス以前の旧約時代の宗教、すなわち仏教、儒教、ゾロアスター教などは、メシヤ降臨に備えるために悪の世界の人々の心を善の方向に導くために、神が与えてくださった神の教えです。紀元前六世紀ごろからいろいろな宗教家が出現したのはそのためです。メシヤは第二アダム（後のアダム）の資格で来られるために、初臨のメシヤが降臨する六数期間（六世紀）前から神はそれに備えて、アジアの地（中東、インド、中国）に人々の心を善の方向に導くために宗教を立てたのでし

た。それがゾロアスター教、仏教、儒教等です。

なぜ神が第二アダム（後のアダム）を送ったかといえば、エデンの園に來た第一アダムが罪を犯して墮落し、地上天国が実現できなくなったからです。それで罪のないアダムを再び創造するという意味で第二アダムを地上に送られたのです。神は第一アダムに先立って、創造の六日前から天地創造を始められました。第二アダムを地上に送る時にも、降臨の六数期間前から、その準備として宗教を立てたのです。（六、六〇、六〇〇等の六数期間前からアダムを送る準備をすることを、六数期間の法則といえます）。

第一アダムが靈的に墮落したので、その後孫である人類もみな靈的に罪人であるということになります。したがって人類を救済するためには、まず靈的に救済されなければならず、靈的に善に導くために宗教を立てたのでした。宗教によって人類の心（心霊）が善になれば、その基台の上に罪のない第二アダム（メシヤ）を送って、人類がメシヤの教えに従順に従うことによって、靈肉の救いをされるのが神の摂理でありました。

そのようにして第二アダムであるイエスが地上に降臨されたのです。しかし、イスラエル民族はイエスを信じないで十字架にかけたので、人類の救済、すなわち地上天国は

実現できなくなりました。そのため、神はその時から再びメシヤを降臨させる摂理を継続してこられました。したがって、メシヤを迎えるために立てた宗教も再臨の時まで存続するようになったのです。

ただし中東のゾロアスター教は唯一神の教えではなく、再臨の時を迎えるには適切でないために、その代わり唯一神のイスラム教が立てられたのです。そして今日、ついにメシヤが再臨し、その間、宗教が人類を善に導く役割をほぼ果たしたので、遠からず人類は再臨のメシヤを迎えるようになります。そして再臨のメシヤの新しい教えを通じて、すべての宗教が統一され、地上天国が実現される段階に至りました。韓国の地に世界の宗教がすべて集ったのも、韓民族が選民であり、最終的にメシヤによってすべての宗教が統一されることになっているからです。

ここにおいて、メシヤの再臨を迎えるための民族宗教について一言述べてみます。キリスト教は再臨を迎えるための世界的宗教ですが、韓国にはメシヤの再臨を迎える民族的宗教がまたありました。その代表的なものが崔水雲の天道教です。天道教は檀君以来の民俗信仰が本然の宗教形態をとって現れた宗教で一八六〇年（再臨の六十年前）に出現したのです。六数期間の法則による出現といえます。

メシヤの再臨の直前の年に起きた三一運動を主導した宗教はこの天道教とキリスト教であったのです。初臨のメシヤを迎えるために民族宗教のユダヤ教が現れたように再臨のメシヤを迎えるための宗教として天道教が現れたと見るこ
とができるのです。

(五) 訓民正音

北韓の民族史観は、ハンゲルの優秀性を認めながらも、それは封建統治の輩たちが人民大衆を支配するための一つの手段であったとみています。その当時の支配層、権力層はハンゲルを使用しないで、大衆庶民にだけ使用させたと
言っており、ハンゲルを用いることによって、大衆庶民を抑圧し、搾取しようとする支配階級の意志をたやすく庶民大衆に伝達できたとみています。しかし統一民族史観は全くそのようにはみません。

ハンゲルは主体性を持った選民の言語としてつくられたのです。選民にメシヤが降臨して、メシヤが将来、世界を統一するためには、それに適う一定の言語が必要です。ハンゲルは正にそのような言語であったのです。神が世宗大王を立てて、このような言語をつくらせたのです。したがってハンゲルは、必ずこれから世界の共通語になるように

なっています。かつて二〇〇〇年前にイエスが十字架で亡くならなかったならば、イスラエルの言語が世界の共通語となっていたことでしょう。しかし今日まで、キリスト教は主として西洋社会、特に英国やアメリカを通じて世界に伝播されたために、英語が世界共通語のようになったのです。しかしこれからはハンゲルが世界共通語となります。

しかし、ハンゲルだけが残って他の言語は皆なくなってしまうのかといえば、決してそうではありません。個人個人に共通性とともに個性があるように、言語においても、各民族または各国家の固有の言語はそのまま保存されながら韓国語が共通言語となるのです。

ハンゲルはメシヤの再臨に備えるための言語です。それで、六数期間の法則に従い、再臨の時期である二十世紀から六数期間前に相当する十四世紀に、訓民正音の創始の主人公である世宗大王が現れたのでした。それはちょうど初臨のメシヤを迎えるために、孔子や釈迦が六数期間前に来られたのと同じです。このようにみる時、神の摂理において、世宗大王は今後、長らく天の側の善君として、摂理歴史にその名をとどめることでしょう。

(六) 民族の未来像

中心になっています。そのために、二〇〇〇年前から韓国の歴史が本格的に蕩滅復帰歴史の性格を帯びてきたのです。この民族中心のエデンとは、神が檀君神話を通じて知らせた、弘益、敬天、光明の世界です。その世界が正に再臨のメシヤによって立てられる地上天国であり、統一文化世界です。

(七) 理想世界実現のための指導者

北韓の民族主体史観は、理念社会すなわち地上楽園の建設を指導する金日成を「首領」または「民族の太陽」として神格化していると同時に、階級闘争の民族歴史を最終的に終結せしめる最高の指導者として崇めています。それは統一史観から見れば、「偽と真の先後の法則」によって、歴史の終末期に現れたサタンの側の偽のメシヤであること
を自証しているのです。統一史観によれば、歴史の終末期には地上天国を建てるためにメシヤが降臨しますが、その時に「偽と真の先後の法則」によって、必ずサタンが神の方法を模倣して、真のメシヤの出現に先んじて、あらかじめ偽のメシヤを地上に立てて、偽の地上天国を建設することになっているのです。

二〇〇〇年前にイエスが来られた時、それに先立って口

北韓の主体史観の「民族の未来像」は、金日成首領の領導の下での地上の楽園である社会主義社会の実現です。金日成の教えに従いさえすれば、未来には必ず、豊かで自由な地上の楽園である理想社会、すなわち社会主義社会が到来すると約束しています。しかし、そのような約束は空想であって実現しえないということは、ソ連や中国において実証されています。ソ連において、すでに社会主義は失敗に終わったのです。中国においても、数年前、当地を訪ずれたアフリカの社会主義国家、エチオピアとモザンビークの大統領に対して、鄧小平は「社会主義を採用するな。中国は社会主義を採用して失敗した」と語っています。

それに対して統一民族史観の民族の未来観によれば、韓民族は二〇〇〇年前から選民として選ばれたのであり、メシヤが再臨して、選民を中心として、必ず全世界に地上天国を立てることになっています。したがって韓国は将来、地上天国の中心となります。これは韓国の歴史が世界の歴史と同じように復帰歴史であるからです。人類歴史が復帰歴史であるというのは、人類の祖先であるアダムとエバが墮落によってエデンの園を追放されたので、一定の蕩滅期間を経た後に、再びエデンの園に帰っていくのが歴史の必然性であるからです。そして、そこでは必ず選民の歴史が

ローマが建てられました。ローマの皇帝であったアウグストゥスが正に偽のメシヤであり、彼を中心としたローマの平和（パックス・ロマーナ）は偽の天国でありました。再臨の時には、スターリンがサタン側の偽の世界的な再臨のメシヤであって、彼の治世中、ソ連を中心に世界共産主義が団結していた期間は偽の地上天国の時代でありました。それと同じく、金日成は偽の民族的な再臨のメシヤであって、彼が地上楽園として建てた北韓は、正に偽の理想社会でありました。しかし偽のメシヤは真のメシヤの前には必ず消え失せることになっています。偽の地上天国も真の地上天国が近づけば、それに吸収されることになっているのです。

二〇〇〇年前にイエス様が十字架上で亡くならなかったならば、真なる地上天国が建てられ、ローマの平和はイエスの地上天国に吸収、統一されて、イエスを中心とした永遠に平和な世界が実現されたはずです。聖書には、メシヤを王として（マタイ二四・二九）、また父として（ルカ一・三二）、イザヤ九・六）表現しています。北韓において、金正日が金日成の位を継承すれば、文字通り王位を世襲したことになります。しかしサタン側の偽のメシヤは、結局、最後には神側の真なる人類の大王、真なる人類の父母、真

歴史の始めから予定されていたのであり、そのために選民を立てたのです。ところが選民として立てられたイスラエル民族が、責任を果たさなかったため、メシヤが十字架にかかったためであり、再臨の必要性が起きたのです。そのために新しい選民として韓民族が立てられたのでした。したがって韓民族にメシヤが再臨したのは、神の摂理から見た時、人類歴史の始めから摂理的な必然であると同時に、民族史的な必然性でもありました。

(九) 歴史解釈の目的

すでに述べたように、北韓の歴史解釈によれば、歴史解釈を学ぶ目的は「歴史は闘争歴史であることを理解して、敬愛する金日成首領に忠誠を尽くす共産主義革命家になることにある」と言っています。これは「歴史解釈の目的は、歴史の性格と変遷が自身の希望や哲学的内容と一致することを確認して、これからの態度と行動の方向を決定するところにある」という統一思想の立場と基本的には同じです。けれども北韓の歴史解釈を正当化するために、その学説に合うように、歴史を歪曲、捏造しながら金日成を神格化したところに問題点があるのです。

統一史観から見れば、歴史解釈における前提条件は、記

なる王の王が出現すれば、神の摂理によってみな吸収されるのです。

(八) 再臨のメシヤと民族史

唯物史観によれば、一人の人物が特別な人物や指導者となるのは、その人物の天才的な素質によってではなくて、環境（自然的、社会的環境）によるものだと思います。すなわち環境が人物を生むのであって、個人の特性が人物を生むのではないといえます。しかし金日成に関しては、単純に環境によって生まれたのではなくて、歴史の必然性によって、すなわち韓民族の階級闘争史の延長線上で、反米反日の反帝闘争の家系史をふまえて、必然的に生まれたのだといえます。

指導者に対するこのような説明の方式は、やはり「偽と真の先後の法則」によって説明できます。すなわち金日成は偽の父母であるために、「メシヤ出現の歴史的必然性」を盗用して、「金日成出現の歴史的必然性」を主張しているのです。このような主張を立てるために、彼は民族史の多くの部分を歪曲または捏造しました。特に家系と経歴の大部分を捏造しました。

すでに述べたように、神の摂理において、メシヤは人類

録に残っている歴史的な事実を歪曲しないで、そのまま資料とすることです。正確な史料をもって歴史を解釈しなければなりません。ところでその解釈の一次的な目的は、その史料の中に一定の歴史哲学の内容と一致する事実があるかどうかを確認するところにあります。

例えば統一史観の復帰の法則には「四数復帰の法則」という歴史法則があります。そこで歴史的な事実の中に、四〇年や四〇〇年を経て一つの時代が変わった例があるかどうかを調べてみるのです。統一史観では、旧約時代や新約時代の歴史的史実の中に、四〇年や四〇〇年という期間が相応して、くりかえし現れたということを確認できます。それでもって「四数復帰の法則」は架空的な法則ではなくて、実際に歴史に作用した法則であることが分かります。その他の多くの歴史法則も、例外なくすべて歴史的な事実と一致することが分かります。

このようにして歴史的事実と歴史観の事実が一致するということが確認されれば、この歴史観はゆるぎない真理であり、したがって未来には、必ずこの歴史観が約束したとおり、理想世界が到来することが確信でき、またその日の到来を早めるために総力を結集することができるのです。